

琉球方言助詞瞥見

野原, 三義 / NOHARA, Mitsuyoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

187

(終了ページ / End Page)

222

(発行年 / Year)

1985-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002562>

琉球方言助詞瞥見

野原 三義

琉球方言の助詞研究は、今のところチェンバレンの『日琉語比較文典』^{注1} (1895) の中で首里語に触れたのが古いと言えるだろう。次いでおも立ったものをあげると宮良当社の『八重山語彙』(1930) に石垣方言の助詞が触れられており、金城朝永の『那覇方言概説』(1944) には那覇方言の助詞の章がある。平山輝男・中本正智の『琉球与那国方言の研究』(1964) には与那国方言の助詞や南琉球の助詞について触れられている。最近では『奄美方言分類辞典』上(1979)、下(1980)、『沖繩今帰仁方言辞典』(1983) という優れた書物に大和村大和浜と今帰仁村与那嶺方言の助詞の詳しい記述がある。1983年12月に法政大学沖繩文化研究所から出版された『琉球の方言』第8号は助詞特集である。助詞ということで一冊としてまとめたのは、これが最初である。

通時的研究は、伊波普猷の諸論考の中で多く触れられている。まとまったものでは「おもろの研究——古代国語の助詞「い」の用法の瞥見——」(1935) がある。この特徴的な助詞については、外間守善にも「古代語助詞「い」の文法的性格」(1976) がある。

主な文献はこれであらかた上げた感じさえするから琉球方言の助詞研究は他の分野に比べて進んでいないと言ってよいだろう。

以下、琉球方言の助詞の共時的・通時的な面の概観を試みる。伝統的な方法で各特徴的と思われるものを適宜とりあげることにする。共時面では那覇方言の用例をあげて琉球における広がり具合をみたり、関連性を考えてみることにする。通時面では「おもろさうし」と琉歌・組踊を取りあげる。

現代語の助詞

I 格助詞

I-1 ga

(イ) 主格

w:ga suŋ <私が する>

(ロ) 連体格

ʔari:ga muŋ <あれの 物>

(ハ) 動作の目的

ʔa:fi:bi:ga ʔitʃuŋ <遊びに 行く>

このような用法は琉球方言では広くみられる用法であるが、八重山の諸方言では消えてしまっているようである^{注20}。奄美の喜界方言と八重山の与那国方言では ga という琉球方言では特徴的な形で存在する。湯湾方言では mi:gja: <見に> のように口蓋化されることがある。

I-2 nu

(イ) 連体修飾

ja:nu ʔwi: <家の上>, re:kuninu hana <大根の花>, mitʃinu hanta <道の側>

(ロ) 連用修飾

tʃi:bu:ru:nu ja:muŋ <頭が 痛い>

ʔuta:nu tʃi:kari:ŋ <歌が 聞える>

上のような用法は琉球方言を通じてみられる。

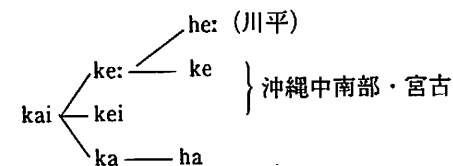
I-3 場所・目標などを表すカイ系, カチ系などについて

ja:ŋkai usa <家に いるよ>

ʔu:ʃi:ma:kai ʔndʒaŋ <奄美大島へ 行った>

こういうように用いられる助詞はいろいろな形で分布しているので分類と変化過程を考えてみる。

A-1

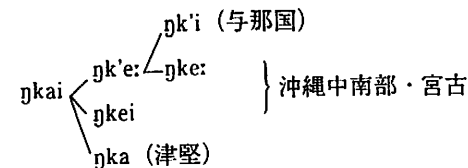


(新城) (黒島・真栄里)

kaŋ — ka 徳之島伊仙町

徳之島伊仙町の kaŋ は kai の変化では無いかもしれないが、関係は有りそうなのでここに置いておく。

A-2



現われる。raga は音韻転倒で出来た形か。

I-5 sa:ni, sai <手段, 行為者など>

ʃi:gusa:ni tʃi:ŋ <小刀で 切る>

ʔundʒusa:ni ʔitʃikwimisori <貰方で おっしゃって下さい>

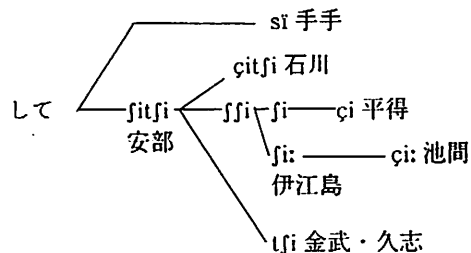
那覇の垣花, 糸満には sa:ma という形もある。北部の瀬底方言の sai, 久米島鳥島の ʃini, 遠く竹富島の sani, 鳩間の sa:ri も同系である。この助詞は沖縄中南部でよく用いられるが, 他ではそれほど勢力が無い。

I-6 ʃʃi, ʃi <材料, 期限など>

ka:ma:bu:ko: ʔijuʃʃi tʃukuig <かまぼこは 魚で 作る>

ʔittʃi:ʃi subinataŋ <一日で 完成した>

この助詞は「して」に起因する形である。変容の分類は次の通り。



ʃʃi, ʃi という形は奄美から八重山与那国まであまねく分布する形である。

I-7 na:r:

ma:na:ri: tʃaga <どこから来たか>

この助詞は使用範囲が狭い。首里や今帰仁の na:di: とは同じものである。徳之島の nati, 津堅島の naggi: と同系のものか。今帰仁の dati: や da:ʃi: なども意味が似ているが関連あるものであろう

か。

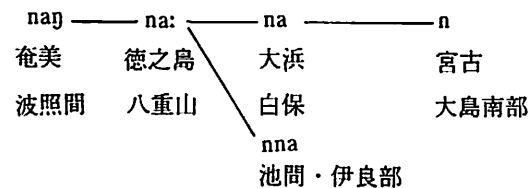
I-8 ni <対象, 時など>

ʔja:ni kwɪ:sa <お前に やるよ>

ʔatʃa:marini ʃe: ʃimug <明日までに やれば よい>

このように用いられる ni の変容と変化過程をあげる。ni を nai の変化形と位置づけてみたが, これらとは別の元元からの「に」であるかもしれない。

nai ————— ne: ————— ni: ————— ni
 首里・与論 安波・知名 与那嶺 沖縄・沖永良部・喜界



I-9 jaka(:) <比較の規準など>

kurijaka(:) ʔare: maʃi <これより あれはよい>

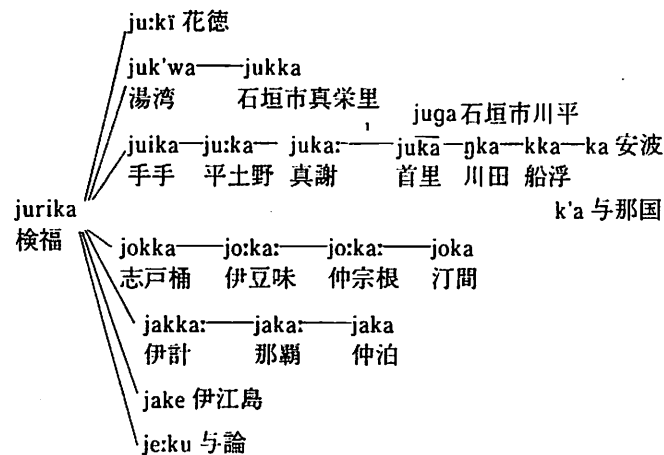
ʔarijaka tʃurasafe: urag <あれより 美しいのは いない>

このように用いられる <より> に当たる助詞は, 出自の異なりや音韻変化の結果, 非常に複雑な形で分布している。不明な部分もあるが以下の5種に分類してみる。

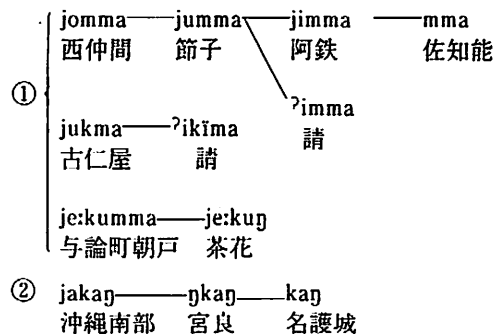
A より系

juri 井之川・阿三

B よりか系



C よりも系



D 宮古タイプ

ju:ra

juzza—ju'isa

ju:i—jui

ju:l l a—ju l l u

ja l l o:—ja l l u:

E その他

nika (和泊町田皆, 瀬利覚), tsika (平良市大浦, 西原, 池間),
 nanna (竹富島), kara (小浜), gara (波照間), ra, rag (鳩間),
 kkima (黒島), k'uma (赤木名), kuma (名瀬)

A, Bは徳之島, 沖永良部北部, 与論, 沖縄諸島, 八重山諸島,
 Cの①は奄美②は沖縄や八重山に分布している。Cは係助詞「も」
 に相当するものが付いているが、「も」の意味のあるもの, 即ち「よ
 りも」の意から, 形骸化してしまってほとんど「より」の意になっ
 ているものまで含んでいる。Dは宮古にのみ存するタイプ。「より」
 に何かが付いていると思われるが, よく分からない。EはA~Dタ
 イプの変化したものに更にいろいろな形が付いたものや転成したも
 のなどが含まれていると思われる。

I-10 tu <相手・共同者, 並列など>

rufigwa:ta:tu ?wi:dziga ?ndzag <友達と 泳ぎに 行った>

?aritu kuritu dzure: mafiga <あれと これと どれは よいか>

このように用いられる tu は, 琉球方言において別の形をみたこ
 とがない。

I-11 ju と ba <目的のヲ>

笠利町節田方言で dʒi:ba kakjuŋ 〈字を書く〉 というように用いられる目的の ba は、九州の方言から連なっているものであるが、琉球方言では喜界・奄美大島・徳之島・沖永良部島に存し、沖縄諸方言ではほとんど消えているが、今帰仁方言には化石的に形をとどめている^{注30}。南琉球では宮古本島・大神・伊良部・多良間・石垣島・黒島・鳩間島にも存している。

一方、伊良部町伊良部方言で tʃa:ju kaddʒi ku:tidu n:tʃibuta: 〈茶を買って来いと言っていた〉 などと用いられる目的の ju は、奄美諸島・沖縄諸島の北琉球方言では消滅している。宮古本島・大神・池間・伊良部・来間・多良間・水納・石垣島・竹富・黒島・鳩間などという南琉球方言には存している。

各諸島方言の関係を図示すれば次の通り

	ba	ju
奄美諸島方言	○	×
沖縄諸島方言	×(○) ^注	×(○) ^注
宮古諸島方言	○	○
八重山諸島方言	○	○

注) ただし今帰仁方言には化石的に残っている。(○)印は通時的には存在するということ。

いかなる理由によって沖縄諸島方言のみで通時的に存在した ba 及び ju が消滅して行ったのか興味のあるところであるが詳らかでない。

II 係助詞^{注4}

II-1 ga 〈か〉

?ja:ja ta:ga 〈お前は 誰か〉

ma:nkaiga ?ndʒara 〈どこへが (行ったのだろうか) 行ったら〉

上のように疑問語と結びついたり係結法を持つ疑問の意の ga は幾つかの形で琉球方言に広く分布している。ga (稀に現れる ga: も含めて) は奄美諸方言・沖縄諸方言・宮古諸方言に広く分布している。ka (或いは ka:), kai という形は奄美や八重山諸島に散在している。喜界と与那国は ga である。

ga と呼応する活用語は普通は -ra 形であるが、奄美大島では湯湾の ?uraja da:tʃiga ?ikjuru 〈お前はどこへ行くか〉 のように -ru 形を用いる所もある。宮古や伊良部島でも連体形で結ぶようである

^{注50}

II-2 ru 〈ぞ〉

ja:kairu jaru 〈家へぞ である〉

?ja:ru jati: 〈お前ぞ であったか〉

強調の意の係助詞 ru は、上のように係結びの決まりを持つことと陳述と呼応する。琉球方言の変容は du と ru である。du は全琉球方言に分布しており、ru はその間に散在している。係結も全琉球にあまねく分布していて活用語の -ru 形 (または連体形) で結ぶ、伊良部町国仲方言 bagadu mi:l 〈私がぞ見る〉 久米島具志川村島島の ?aigaru tʃuwasai 〈あれがぞ美しい〉 のように結びの部分音が音韻変化した形もあるが、呼応関係は保たれている。

II-3 ja くは)

?anu ki:ja takasag <あの 木は 高い>

?ja:ga: narag <お前がは 出来ない>

係助詞 ja は沖永良部島を除いて全琉球方言に分布している。沖永良部の方言には ja の古形である wa が分布している。

ja は音声環境により融合する方言と融合しないか或いはしにくい方言がある。前者は喜界・与論・沖縄中南部・久米島・宮古・八重山諸方言であり、後者は奄美大島・加計呂麻島・徳之島・沖縄北部・与那国などの方言がそれである。

沖縄の諸方言では係助詞 ja が格助詞 ga や nu に結合する特徴的な現象がある。与論的那間方言で ?urago: narannu <お前がは出来ない>、徳之島町花徳方言で ?jaggaja fa:ranfa:re: <お前がは出来ないだろう> とガ+ハの例があるが、奄美ではあまり見られない。南琉球の方言では、いまだに観察したことがない。

II-4 g くも)

?atfa:ŋ ?afibi:ga ?itfuŋ <明日も 遊びに行く>

tfa:ŋ sa:ta:ŋ ?asa <茶も 砂糖も あるよ>

のように用いられる係助詞 くも) には、mu 系と mai 系がある。後者は宮古諸島の mai 系と徳之島の ma・mma・mba である。mu 系の mu は喜界と沖永良部にあり、奄美大島・加計呂麻・請などにも存する。mu から変化した g は沖縄諸島・八重山諸島に広く分布している。奄美の方は与論島に存し、奄美大島にも散在している。奄美の ma 系統は、現在は徳之島にしか存しないが、かつては奄美に広くあったと思われる。何故なら、他の島々の方言の複合した形式

—例えば II-5 の奄美型など—の中にそれを見ることが出来るからである。

沖縄諸方言では係助詞 g くも) は格助詞 ga や nu に結合する。これは奄美のいわゆる南三島の方言でも観察できる。即ち、徳之島町花徳 taru:gamba wakarag <誰がも分からん>、和泊町国頭 tarugamu atjaŋ <誰がも知っている>、与論町茶花 ?uragan dikiranu <お前がも出来ない> などがその例である。奄美大島や南琉球では聞いたことがない。

II-5 ntfo:ŋ くさえ)

?amintfo:ŋ φuranre: <雨さえ 降らないよ>

?abi:ntfo:ŋ sansa <しゃべりさえ しないよ>

くさえ) の意の係助詞の実態は次の通り。奄美型は tfo:mu, tʃumma など。沖縄と南三島型は tʃoŋ, tʃo:ŋ など、これは宮古諸島や与那国にも散在している。宮古型は dja:ŋ, dʒa:ŋ など。伊良部型は tumma, dumma などであるが奄美型に通じると思われる。八重山型は dzag, tsag など宮古型に通じると思われる。

その他、奄美大島・喜界・徳之島には sai 系、八重山には sagi 系、与論・沖永良部には je:ka 系などがある。奄美の deŋ・denso と竹富町黒島の do: は関係あるか。徳之島半土野の dama:ʃi, 沖永良部国頭の damari は「おもしろさうし」に関連形がみえる。与論の gadi は くまで) の意から くさえ) の意に変化しているようである。

Ⅲ 副助詞^{注4}

Ⅲ-1 bika:ŋ, bika: <ばかり>

kwa:ʃibika:ŋ kamuŋ <菓子ばかり 食べる>

ʔamibika: ʔuto:sa <雨ばかり 降っているよ>

<ばかり>の意の副助詞は上のように複数個からなることが多い。例をあげれば瀬戸内町蘇苺で bēhəri, bahari。天城町浅間で bē, bē:na。伊平屋村我喜屋で bike:, bika:, bake:。仲里村真謝 gatʃa:, bike:。伊良部町伊良部 tja:na, ba:ki, ba:ʔi。竹富町波照間 gasu, ggaʃi のようにである。しかし、瀬戸内町節子 bē:ri, 徳之島町花徳 bē(:), 和泊町和と国頭村辺野喜の be, 竹富町竹富の bai のように 1 個の場合もある。

琉球方言の分布をみるに baka:, bika:, buka:, bagara, bahari, ba:ri の群からなる全琉型がある。これは名の通り北の奄美諸島から南は八重山諸島与那国まで分布しているタイプである。奄美型は瀬戸内タイプの bēhəri, 奄美本島タイプの bē:ri, 徳之島・沖永良部タイプの bē:, be:, be:ŋ などからなっている。次にこれらとは形の異なる tʃa: 群がある。そのうち沖縄北部型は ntʃa:, tʃa:。宮古型は tja:ŋ, tʃa:ŋ。八重山型は tagga: などからなっている。沖縄北部型の中には沖永良部・与論・今帰仁の <まで>の意の形も含まれている。意味の類似から転成しやすいと思われるからである。以上のような形以外にも波照間の gasu, 久米島に広く分布している gatʃa: などがある。いろいろな転成もあると思われるが瀬戸内町の方言には made で <ばかり>の意になっているものもある。

Ⅲ-2 mari <まで>

ja:m^umari mattʃi turaʃijo: <来年まで 待って くれよ>

ja:ru:mari tutti karanri <家守まで 取って 食べたよ>

などと用いられる <まで>の意の副助詞の分布は次の通りである。

madi, mari からなる madi 系は、おおまかに言って、喜界、国頭村を除く沖縄諸島、鳩間・小浜・波照間・与那国などを除く八重山諸島に分布している。gadi, gadi, gari, garre: などからなる gadi 系は沖縄の名護以北から奄美諸島にかけて分布している。gami 系は宮古諸島にのみ分布する形である。ta:na:, ntana, ntani などからなる ta:na: 系は沖縄北部の大宜味村国頭村と奄美の南三島即ち徳之島・沖永良部・与論に分布する形である。伊良部町伊良部の ta:ki, 平良市池間の ta:çi も同じグループとしてよからう。jaki: 系は今帰仁村・伊江島・久高島にある形。wa:ki 系は首里那覇・竹富町の島島・与那国などに存する形である。東風平村小城には ma:ki という形があるが madi と wa:ki のコンタミネーションであろうか。那覇方言の <まで>の意の接尾辞 ka に類するものも広く分布している。ちなみに例示すると徳之島 kja, ka。今帰仁 k'a。瀬底 ka。平良市東仲宗根 kja。伊良部町伊良部 ki。多良間 ke。鳩間 keg などである。

IV 終助詞

通用の範囲という点で三通りに分ける。即ち、(A)全琉に比較的広く通用しているタイプ。(B)沖縄諸島とか沖縄北部地方といった広がりタイプ。(C)非常に狭い地域で用いられるものなどである。以上、適宜取り上げてみる。

A-1 i <疑問>

?ure: wa: munu_i <それは 私 ものか>

jikutfe: ?utʃinatʃi: <仕事は 終わったか>

上のような i は奄美諸島・沖縄諸島にみられ、宮古の伊良部や多良間にも存する。和泊町国頭の tʃ'ubiwa naze: <帯は無いか>, φa:mu jame: <菌も痛いかな> などの e も同系としてよかろう。具志川村鳥島にも似た形がある。

A-2 na: <疑問>

kurina: ?arina: <これか あれか>

na: φakaina: <那覇へか>

この形も全琉的に分布している。

A-3 mi <疑問・尋問>

ja:kai ke:imi <家に 帰るか>

?ja:ja bintʃo:ja so:mi <お前は 勉強は しているか>

北琉球でよくみられる形である。沖縄諸島は大体 mi であるが、津堅では me という。大和村大和浜の mī, 徳之島の mē, mī, mu, 与論の mui などは同系であろう。

A-4 gaja: <推量, 自問>

?are: taru:gaja: <あれは 太郎かな>

nu:ntʃi natʃo:gaja: <なぜ 泣いているのかな>

これらは奄美の南三島や沖縄諸方言、八重山の川平・波照間などにみられる。これに意味の似た kaja:, kai, ka: などは大島諸方言や八重山諸方言にみられる。

A-5 sa <よ, 感嘆, 念押し>

?i:nanu φe:na: ninto:sa <こんなに 早く 寝ているよ>

ja:kai ke:isa <家に 帰るよ>

これは奄美の南三島から沖縄・宮古・八重山・与那国と広く分布する形である。

A-6 ro: <断定, 主張>

kure: wa: munro: <これは 私 ものだ>

wanne: ?itʃunro: <私は 行くぞ>

この助詞は全琉に do: とか ro: で分布している。

A-7 nri <引用>

?itʃunri ?i:tag <行くと 言っていた>

?are: ke:i:nri <あれは 帰ると>

那覇方言の用例からは格助詞とするより終助詞の方が適当である。分布は奄美の方は tʃi, tsī. 沖縄は ri, nri, di, ndi のような形であるが、金武方言の nni, 仲里村真謝方言の tʃantʃi という形もある。宮古方言は ti が多いが、伊良部町国仲方言は tʃi である。八重山も ti が多いが、川平の di, 大浜の nde という形もある。与那国は ndi である。

A-8 na <禁止>

?mmagkai dʒi:ja kakuna <そこに 字は 書くな>

全琉 na であるが、奄美大島や沖永良部には nja と併存のところもある。

A-9 ja: <ね, 念押し>

ʔʃu:ja ʔatʃisaŋja: <今日は 暑いね>

この形は北琉球に多い。

A-10 jo: <よ, ぞ, 軽い強調>

ʔariga: suŋjo: <彼がは するぞ>

この形は全琉的に分布している。

A-11 ɕi:, i: <ね, 念押し>

ʔaʃibiga ʔikaɕi: <遊びに 行こうね>

この場合の ɕi: は i: に置き替えても同じ意味である。瀬底・具志川村真謝・伊良部町国仲・与那国などでも i: を用いる。

A-12, ja <疑問>

奄美大島・徳之島・八重山諸島にみられる形である。

B-1, da:, dʒa: など。<断定>

奄美大島の笠利町節田, 宇検村湯湾で dʒa, 徳之島は da, ra:, da:, da:nu, 和泊町国頭 dʒa:, dja:, 多良間 dʒa:, 竹富島や鳩間は da:, 与那国は dja: などである。

B-2, dʒaga, daro など <推量>

喜界町志戸桶の dʒaŋga, 節田 dʒaga, 湯湾 daro, 徳之島 dʒaro:, dʒaga:, gidʒaga, 与論町古里 daro などという形がある。

B-3, do: <疑問>

徳之島 do:, do, du, 与論町麦屋 du などである。

B-4, sami <強調>

今帰仁・瀬底・那覇などで用いられるが, 与論町那間にも ssami という形がある。

B-5, ɕa: <卑しめ>

沖縄方言でよく用いられる, 遠く離れて与那国方言にもみられる。

B-6, ira <推量, 念押し>

平良市西原, 大神, 伊良部町国仲, 佐和田などに存する。

B-7, dara, dara:na など <推量>

伊良部町伊良部 dara, 多良間 dara:na, 石垣市 dara などである。波照間の da:(ra:) も関係あるか。

B-8, rja:, rija: <疑問>

石垣市川平・大浜で rja:, 竹富島で rija: である。川平の ra:, 竹富島の da:, ra: も関係あるか。

B-9, ju: <よ, 念押し>

八重山諸島で盛ん, 宮古諸島でも用いられる。

C-1, ʃi: <断定, 疑問>

国頭村辺野喜あたりでよく用いられる。

C-2, wag <よ, ね>

名護市数久田で用いられる。

C-3, sai, tai <丁寧>

那覇方言で使われる。sai は男が用い tai は女が用いる。隣接する旧真和志市識名では女性も sai を用いる。

C-4, ru:wa <よ, 念押し>

久米島具志川村鳥島で用いる。

C-5, sai, saika:, saiga <断定, 主張>

平良市東仲宗根で観察したが, 宮古では広く用いられる終助詞である。

V. 接続助詞

那覇方言で「読めば」は *jume:*, 「書けば」は *kake:*, 「読んで」は *juri*, 「書いて」は *katji* となる。「ば」「て」などのいわゆる接続助詞は前の形式と合して一語となるので、これらは一つの活用形とみるべきである。しかし、接続助詞といえそうなものもあるので、以下幾つかあげる。

V-1, *munnu* <のに。逆接>

?it^hsurumunnu ?e:dʒin sansa <行くのに 合図も しないよ>

宮古で勢力が弱いように思われるが、類似した形は、大体全琉に分布している。以下の例で二か所に同名があるのは両例があるということである。

munnu (瀬戸内町蘇苺, 伊仙町糸木名, 和泊町国頭・和, 国頭村辺野喜, 今帰仁村仲宗根, 本部町瀬底, 首里, 波照間), *munu* (和泊町国頭, 与論町麦屋, 旧久志村久志, 多良間, 石垣市大浜, 波照間, 与那国)。 *munu:* (平良市東仲宗根)。 *mug* (大和村大和浜, 宇検村湯湾, 瀬戸内町篠川・佐知能, 徳之島町花徳, 和泊町和, 知名町田皆, 与論町麦屋, 国頭村辺野喜, 今帰仁村与那嶺)。 *nu* (笠利町節田, 旧久志村久志, 竹富町竹富)。 *munni* (喜界町志戸桶)

V-2, *figa* <けれども。だが>

hana: satfo:tafiga mi:ja narantag <花は 咲いていたけれども 実は ならなかった>

?mbusafiga muttji tʃag <重いが 持って 来た>

以下に形かまたは機能の類似したものをあげる。

siga (徳之島手手・井之川, 伊仙町阿三, 天城町浅間, 和泊町国頭, 平良市大神・東仲宗根, 伊良部町伊良部)。 *suga* (旧久志村久志,

金武村金武, 平良市西原, 波照間 [*suka* とも])。 *figa* (天城町平土野, 和泊町国頭・和, 知名町瀬利覚・田皆, 与論町麦屋・那間・茶花, 国頭村辺野喜, 今帰仁村与那嶺, 本部町瀬底, 首里, 具志川村上江洲・鳥島)。 *çiga* (仲里村真謝)。 *iga* (天城町松原, 徳之島町花徳, 勝連村津堅)。 *sugga* (石垣市川平)。 *songga* (石垣市大浜)。 *ga* (笠利町節田, 石垣市川平)。 *ga* (与那国)。 *mundʒaga* (喜界町志戸桶)。 *dʒaga* (名瀬)。 *bag* (大和村大和浜 [*ka* とも], 宇検村湯湾, 瀬戸内町佐知能)

以上, *figa* に類する形は, 奄美の南三島から南に分布する形である。八重山の *ga*, *ga* はこの形の変った形であろうか。笠利町節田の *ga* は周囲に *dʒaga* のような形があるから出自は別かもしれない。

V-3, *gutu* <ので, から, で>

tʃu:ɡutu mattfo:ke: <来るから 待っておれ>

φi:sagutu ?ikag <寒いから 行かない>

以下に形あるいは機能の類似したものをあげる。 *gutu* (和泊町国頭, 知名町田皆, 与論町麦屋, 国頭村辺野喜, 首里, 仲里村真謝 [*kutu* とも], 多良間, 徳之島町井之川)。 *kutu* (和泊町和, 金武町金武)。 *tuni* (和泊町国頭)。 *tu* (和泊町国頭, 本部町瀬底)。 *t'u* (今帰仁村与那嶺)。 *ɖu* (大神 [*tu* とも])。 *du* (多良間, 大神)。以上の語形は関連する形であろう。徳之島町井之川の *go* も関係ある形か。この外奄美には *kana* (笠利町節田, 名瀬)。 *kanag* (大和村大和浜) がある。宮古諸島などには *ba* (大神, 東仲宗根, 池間, 伊良部, 多良間, 水納, 石垣市川平) が目立つ。八重山には *ki* (石垣市川平, 石垣, 大浜, 小浜, 鳩間, 船浮) が多い。他に *gana* (波照間)。

gara (与那国)。junda (鳩間)。nda: (新城) などという形もある。

V-4, gana:, gatji:, gatji:na: <ながら>

munu kamagana: munugatai so:sa <もの 食べながら 話しているよ>

?attfagatji: kame:taŋ <歩きつつあるときに 拾った>

これに類するものは、次のA, B両種に分けられる。

A, gatji:, gana: 類

gatji: (那覇)。gatji: (今帰仁村与那嶺)。gatjina (笠利町節田)。
gatjina: (天城町松原, 旧久志村久志)。gatj'ina: (今帰仁村与那嶺)。
gatjinja: (宇検村湯湾)。gatji:na: (那覇)。gatsina (徳之島町手手, 平良市西原)。gatjana (瀬戸内町蘇荊, 伊仙町喜念, 和泊町和)。
gatja:na (知名町瀬利覚)。gattjana (大和村大和浜)。gatjanaŋ (瀬戸内町佐知能)。
gantjana (与論町麦屋)。gatjena: (知名町田皆)。
gafina: (本部町瀬底)。gasina (伊良部町伊良部)。gisana: (勝連村津堅)。
gana (金武町金武)。gana: (宇検村湯湾, 那覇)。ganna: (今帰仁村与那嶺, 本部町瀬底)

B, ta:na 類

ta:na (石垣市大浜)。ttana:ŋ (竹富町竹富)。tani (石垣市川平)。
nte:na (竹富町鳩間)。ntfanna (竹富町波照間)。ttja:na (伊良部町佐和田)。
ttja:ŋ (平良市西原)。ŋe:ŋ (大神)

Aの類は北琉に多く、Bの類は八重山に目立つ。宮古は両類が混じっている。多良間にはどちらにも属さない ke:na という形がある。B類と沖縄北部の国頭村・大宜味村と奄美の南三島に分布する副助詞Ⅲ-2の<まで>のターナー系との形の類似は興味を引くところである。A類の形式の後の部分は、B類との繋がりを暗示している

ように思われる。

古典語の助詞

通時的研究をする際の資料としては「おもろさうし」(1531年~1623年)、「たまおとんの碑の文」などのような金石碑文、田名家文書のような辞令書、「琉球国由来記」などにあるミセセル・オタカベの呪禱関係の資料、玉城朝薫に始まる組踊、琉歌、中国や朝鮮関係の資料等である。溯れるのは大体16世紀の初め頃までである。ところで、文法研究の対象としては約六千語からなる「おもろさうし」、五組や三組などのある組踊、かなりの数の存する琉歌などが適当であろう。これらの資料は歌謡語であったり、和語の影響をかなり受け入れている、韻文であったりという特徴を有している。普通の人間の日常語を知る資料は残念ながら存在しない。以下にオモロ、琉歌・組踊の助詞の概観を試みる^{注7}。後者の場合は琉歌を中心として適宜とりあげる。

I, 格助詞

I-1, が, ぎゃ

(イ) 主格

聞^{きこ}得^え大^お君^{きみ}ぎや 鳴^な響^なむ精^せ高^{たか}子^こが 御^み島^{しま}祈^{いの}られ、 3-95

浜^{はま}のはま長^{なが}押^お我^わか呼^よひ啼^なも のよて一言^{ひとこと}のいらぬすらぬ

228

(ロ) 所有・所属

石^{いし}ぎや命^{いのち}てば 石^{いし}は 割^われる物 金^{かね}が命^{いのち}てば 金^{かね}は 僻^{ひちや}む物

8-466

天^{あま}のふり星^{ほし}や皆^{みな}か上^{かみ}とてよる 金^{かね}三^{さん}つ星^{ほし}やわ上^{かみ}とてよる

77

(ハ) 目的・時など

大和旅 何 買いが 上て 11-637

何だにが 言ぎや おわにぎや ぬけり 按司 14-998

三月がなれば心浮かされて 波平玉川にかしら洗は 手水の縁

仲嶋の小堀網打か行は 物よ思詰りおその住家 428

「ぎゃ」は「が」が音声環境により口蓋化したもので意味は同じ。

「が」が先行母音の影響で口蓋化する現象^{注8}は、今も奄美大島の方言にみられる。

I-2, の

(イ) 主格

勢利客ののろの あけしののろの 雨くれ 降ろちへ 鎧 濡
らちへ 14-1027

西風の押は南の畔枕 わ嫁なて来すや得米と抱る 192

(ロ) 所有・所属

阿和の親の娘 肝痛親の娘 14-1027

伊野波の石くへり無蔵列て登る にやへも石くひり遠は有な
38

I-3, かし, きやち, かい (方向)

首里かし 行きや人 吾 語れ いやりせ 13-888

辺留笠利から 中瀬戸内 きやち 13-868

下のような「かし」は場所を表す形式体言のような機能である。

宜野湾のてだの よほし嶺 ちよわちへ 大田かし 見居れば
白種の 寄り籠く 清らや 15-1103

琉歌組踊の方向を表す助詞は「かい」である。

久高思里や与論旅かいたう いちやし思暮ち三年待か

137

I-4, から, きやら

(イ) 空間・時間の出発点

阿嘉のお祝付きや 島の颯やれば たにるから 来居り

8-454

今日明て明日に学はたいすれば 明日からの明日や明後日なよさ

45

おにきやらやほこて またからやほこて 孝行之巻

(ロ) 物事の順序

首里杜 真玉杜 げらへて 下足から 基足から おり上げて

5-216

袖からか入ら裔からか入ら よわら押風や定め苦舎585

I-5, に, なへ

(イ) 場所

あかまるに おわる てくの君 崇べて 13-921

謝敷板干瀬に打へ引波の 謝敷宮童の目笑断き 97

(ロ) 時

明けとまに 祈て 降ろす神や 7-372

勢れかり二才衆二三十といかる 四五十に成は強たいもの

47

(イ) 動作主を示す

坂名城たな子す かくて按司に 思われ、 19-1327

夫の村原なへ肝要な物 いやり頼まつて居ん 大川敵討

「なへ」は今も首里方言にあるから、これは当時の言葉を反映しているものと思われる。

I-6, より, よひ, よか

(イ) 比較の規準

妹^{わと}君^{きみ}勝^{かち}り 按^{あん}司^じの頂^{つんじ} 弟^{あとう}者^{ぢや}より 勝^{かち}り 16-1143

天^{あま}川の池^{いけ}や千^ち尋^{じん}も立^たら おれよ^よひも深^{ふか}くおもてたは^たはおれ

25

芋^{いも}の葉^はの露^{つゆ}や真^ま玉^{たま}よ^よかき^かよ^よらさ 赤^{あか}糸^{いと}あぐま^まきに貫^{くわ}きや^やいは^いき^きや

い 全-437

(ロ) 空間の出発点

おが屋^や辺^へより おわ^わよりな 糸^{いと}けり^り按^{あん}司^じ 14-998

天^{てん}より^{より}下^{くだ}りの 布^ぬ織^{おり}上^{じやう}手の 綾^{あや}織^{おり}男^{おとこ}の 錦^{にしき}の金^{きん}欄^{らん}

万歳敵討

「より」「よひ」は同系で後者は前者の変化した形。「よか」は「よ
りか」の変化した形である。

I-7, と

(イ) 相手・共同者

思^{おも}子^こなつ^つら^らし^しや あ^あさ^さと 撓^{しな}て かな^なて 按^{あん}司^じに 思^{おも}われ、

17-1226

彼^かと詠^{えい}たる月^{つき}や又^{また}あらぬ 見^みれは^は仮^か顔^{がん}や袖^{そで}と濡^ぬそ 563

(ロ) 並列

聞^きえ中^{ちゆう}城^{じやう} 上^{かみ}の百^{ひやく}ぢ^ぢや^やらの 思^{おも}て 想^{さう}ぜて 来^こうば 石^{いし}と 金^{かね}
と 合^あわち^ちへす 戻^{もど}せ 2-47

通^と水の山^{やま}や独^{ひとり}い越^こて知^しぬ 乗^{のり}馬^ばと鞍^{くら}と主^{しゆ}と三^{さん}人^{にん} 37

I-8, よ, は〈他動性の動作・作用の目的・目標を示す〉

おもろ音^ね揚^{やう}がりや 宣^{のたま}るむ音^ね揚^{やう}がりや おもろ^よ みお^みやせ 宣^{のたま}
るむ^よ みお^みやせ

8-411

予^よ嗣^しやちやうん^んわ^わ鼎^{てい}の儘^{まま}ならん世界^{せかい}に 彼^かよ^よ恨^{うら}よ^よるよ^よしの有^あひ

350

いわゆる目的の「よ」はオモロでも琉歌組踊でもよく用いられる。

同じ機能の「は」はオモロでは次のように盛んである。

聞^きへ按^{あん}司^じ添^そい^いぎ^ぎや 赤^{あか}田^た門^{かど}は 開^あけわ^わち^ちゑ 5-221

直^なり^り世^よは さ^さだ^だけて 歎^{なげ}へ^へ世^よは さ^さだ^だけて 20-1350

琉歌の次の例は、目的「は」の化石的な姿であろう。

流^{なが}よる水^{みづ}に淪^なは^は立^たて 花^{はな}の色^{いろ}清^{きよ}さ^さ球^{たま}て見^みち^ちや^やる 100

仲^{なつ}柄^{がら}そ^そは^はいと真^ま簾^{すだ}は^は提^たて あ^あに^にや^やら^らわ^わん^ん思^しは^は来^きれ^れ忍^{しの}は

52

その他オモロには「赤^{あか}つ^つ鉄^{てつ}」14-1021, 「^{くに}國^{くに}な^な頂^{たか}」14-1025, 「大^{おほ}和^わと^と糸^{いと}む^む船^{せん}頭^{あたま}」8-457のように格助詞「つ」「な」「ゑ」のように口語ではみられないものもある。

II 係助詞

II-1, か, が, ぎや〈疑問の意と係結び〉

いき^いや^きる さ^さう^うす あ^あて^てか くもこ^こより^りい^いて^てた^たる 11-572

の^のう み^みち^ちへ^へか お^おひ^ひき^きよ^よる 12-731

勝^{かつ}連^{れん}わ 何^{なに}に^にぎ^ぎや 譬^{たと}ゑ^ゑる 16-1144

上のようにオモロでは係助詞「か」「ぎや」に対し、結びは活用語の連体形を用いる。これは今も奄美にはみられる。係結び以外に次のような文末用法等結びの無い形もある。

や^やま^まと^とた^たび な^なお か^かい^いき^きや の^のほ^ほて^てか 21-1497

や^やび^びく く^くま^まも^もと^とに い^いき^きや^やる す^すぢ^ぢや お^おて^てが 火^ひき^きみ な^なお
し^しや^やり つ^つか^かい 9-506

琉歌の係助詞「か」の結びは、口語と同じように活用語の-ra

形が普通である

沙汰かしち呉眠る夜もさめて かたほちゆる月と伽にしやへる

209

次のように疑問語と呼応する用法もある。

深山咲梅の若か句へ漏て 余た鶯の付はちやしよか208

琉歌組踊では「か」と表記されていても [ga] と発音するのが普通であるが、次のように稀に [ka] と発音するものもある。

源河湊川や潮か湯か水か 源河宮童の御浴とくる 99

Ⅱ-2, ど, る, ろ (強調と係結び)

上江洲鳴響み国 御酒や 泉ど し居る 16-1172

首里 ちよわちへからわ 島の主てだよ 今ど 上下 鳴響む

5-213

音揚がりよ 笑てる 行ちやる

8-430

神座の京の内ろ かに ある 20-1385

上のように、係助詞「ど」などに対し、連体形で結ぶというのは、現代語の場合も同じである。この用法以外に、次のような用法もある。

浦添や 神酒ど 有るな 酒ど 有るな 15-1087

勝連人が 船遣れ 船遣れど 貢 徳 大みや 直地 成ちへ

みおやせ 13-867

下のように、琉歌の場合も「と」[du] の結びは連体形が普通である。

洋の伊平屋嶽や浮上てと見よる 遊て浮上るわ玉金 36

数は少いが「深山鶯の声と待ら」(498) という係結びもある。次の例は、特に活用形とは呼応しない例である。

大田名の嫁やないふしやとあすか 石あら朝道の踏の厭て

141

いが身からどやいんしゆすが、とくと思て見では…大川敵討

Ⅱ-3, しゆ, しよ, じよ, す, ちよ, ちよ (強意と係結び)
てるかはが 御差ししゆ 此のきらに 降れわちへ 6-334

君しゆ 世の門 差、まへ 4-174

おきやか思いや 君しよ 守りよわれ 3-134

天が下 國数 大主す よ知らめ 3-97

大君ちよ 肝 揃て ちよわれ 7-364

以上は係助詞「しゆ」などに対して已然形で結ぶ例であり、これが一般的な形であるが「ど」などの係結びに似た「成さへ人が いきよいちよ 待ち居る」12-690という例もある。次は文末などに用いられ、特定活用形と呼応しない例である。

西道の 謝名道る いきやしゆ 東道の 屋宜道る 行きやしよ

14-996

石てんが おもろ 真人の 競 [い] ちよ 見物 10-520

オモロ語で盛んであったこの種係助詞は、琉歌組踊では「のかす毒かに有る」496, 「あたねかきてやんす御衣懸て挽ひ」79, 「浦の蓼草や誰す彦か」457, 「誰がす夜深くに 殿内踊入ゆす」(手水の緑) のように単語や慣用句のようなものの中に埋没してしまうが、意味を強めるという特徴はまだ保っている。

Ⅱ-4, は, や, わ (提題の「は」)

吾は 折て 走り居る 22-1535

今日は 若殿内 明日は 米須かちへ 14-995

なよ筈わ て取り 上手 癖で清らわ ゆう取り 上手 風の

手^てや 帆袋^{ほうぶくろ}に 撓^{しな}へ 波^{なみ}の手^てや 船腹^{ふねはら}に 撓^{しな}へ 13-838

係助詞〈は〉は、上例のようにオモロ語では「は」「わ」「や」と表記されている。「は」「わ」は同一のものの異表記であろうから、それと「や」の二通りということになる。「や」は「は」「わ」が変化した形であるが、オモロ語では両語併用の段階であった。琉歌組踊語では

天御子の御神天下りめしやうち 作る嶋国や世々にさかる

1

歌と三味線のむかし初^{はつ}や 犬子音東の神の美作 2

のように「や」に変化しているが、ごく稀に「手習^{てな}は坂に押登る車」289のように「は」をみることもある。

Ⅱ-5, む, も

(イ) 事情の類似した事物の提示

今日^{けふ}も 明日^{あした}む 御捧^{みこ}げど 走り居^よる 14-1049

とぎゃわ 魚^{いさ} 突^つく いぎよ^も 蛸^{たこ} 突^つく 海^{うみ}む 親物^{おやもの} たきや 15-1100

宵^よも 暁^{あけ}も 昇^{のぼ}りて 思出^{おもいで}は はなの 梯^{はし}の 立^たよ 増^まて 306

(ロ) 事情の類似したことからを暗示する

鳴響^{なるひび}む 棚原^{たなはら}に 冬^{ふゆ} 夏^{なつ}も 判^からず 15-1092

誰^{たれ}よ 恨^{うらみ}とて 鳴^{なる}か 浜^{はま}千鳥^{せんりゅう} 逢^あぬ 面^{おもて}難^{がた}や 我身^{わがみ}も 共^{とも}に 349

Ⅱ-6, ちよむ, ちよも, ちやうん〈ある事象を普通でないこととして例示し、普通であることを暗示する〉

汲^{くみ}む 清水^{しみず}や ちよむ 見^みちへ 行^いちへ 息^{いき} 伸^のばまし 11-557

のろや ちよも やぐめさ 主^まや ちよむ やぐめさ 14-1029

昼^{ひる}や ちやうん 里^{さと}とな 原^{はら}々や よひ 夜^よの 小夜^{せや}中^{ちゆう}や 免^{めん}ち 給^{たま}れ

106

本助詞は係助詞「や」に付くのが普通である。

Ⅱ-7, たもす, だもす, てやんす, だへんす〈さえ〉

意味はⅡ-6に大体同じである。Ⅱ-6は tʃo:g, ntʃo:g という形で今も使っているがⅡ-7の形は那覇方言などでは使わない。

天頂^{あまつぐ}は 雨^{あめ}たもす 漏^もらね 12-1234

按司^{あんし}だもす かに あれ 下司^{げし}だもす かに あれ

7-390

この形は琉歌組踊では

御側^{みわき}居^ゐて たいんす 思^{おも}や 増^まや へい 別^{わか}て わぬ 独^{ひとり}い 成^{なり}は 茶^{ちや}主^{ぬし}か

438

のように「たいんす」[densi] になっているといわれる^{注9}。奄美の八月踊り歌(大島本島・喜界島)には

天^{てん}ぬ 星^{せい}だます 一^{いち}つ 成^{なり}て ど 照^{てる}ゆり で 吾^{わが}達^{たち}一^{いち}つ 成^{なり}て と 遊^{あそ}べし や べろ

^{注10}

のようにオモロと似た語形が存する。共時的にも徳之島町・沖永良部には似た形がある。

Ⅲ 副助詞

Ⅲ-1, かめ, きやめ }
Ⅲ-2, きやて } 〈まで〉
Ⅲ-1, まて

(イ) 動作や事柄の到達点

たらかに きや さいく おほつ きやめとよて 5-219

ちやうや おへまし かほう とき とりやり ひやくさ きやめ おほこり しよわちへ 12-1217

かくら きやて とよて おほつ きやて とよて 6-304

(ロ) 動作・作用の及ぶ限界

にるや せぢ あらかきやめ きみきやせぢ あらかめ

3-100

(ハ) 一から一まで

ともから ほいまで おしかけ しなて 12-698

オモロでは「きやめ」系がよく用いられる。「きやて」は5例で「まで」は1例のみである。琉歌組踊では次のように「まで」[madi]が普通である。

千里渡海までも照る月やひとつ 彼も詠よら今日の月や

78

花と思は里前花待ち給れ いつまでも思は御衣いまおれ

164

しかし、組踊には「ぢやで」もあるが、組踊は古語も取り入れて作り出したということだから、オモロ語などの借用ということが考えられる。

Ⅲ-4, ばかり, ばかりひ, 計り, 計い <ばかり>

(イ) 当該のことに限定する

里と御衣重へ別ち袖貫は 思事も言ぬ泪計り 172

首里親国やれば楽ひや竿む聞へ 我嶋山国や鳴木計い

442

(ロ) 次の句の中で用いられるときは <一なら一になってしまえ>

のような意である。

悪縁や袖にむすばはんばかり わ身や首里みやだりやてど行きゆる 執心鐘入

約束の誓やたからはもばかり 罪の無蔵が上にはきはきやしゆが

全-2193

本助詞は「おもろさうし」にはみえない。

Ⅳ 終助詞

Ⅳ-1, さらめ, さめ <強意>

浦崎の平良に 鼓打ちちへ 遊べば 糸の子 平良子 さらめ

20-1368

東方の角の魚 向かて 飛ぶ 角わ魚 守る 神 さらめ

13-893

十尋屋にをても八尋屋に居も きもと肝さらめ按司も下司も

75

押風も今日や心あて更め 雲晴て照そ月の美さ 434

琉歌には、さらに意味と形の似た「さめ」があり、次のように用いられる。

哀さめ無蔵とかん自由もならぬ 月日押詰て年や寄い

318

よかてさめ姉部神遊しち遊て 我すた世に成は御留されて

107

Ⅳ-2, な

(イ) 感動

此が 清らさ 此が 見欲しや 有居るな 14-982

(ロ) 勧誘

撓わにな やびきやにな 糸けり 按司 14-998

としや名護からど寄ゆんでや聞きやる 首里と名護境にあざかい
植えらな 全-45

(ハ) 願望

あけやふ自由ならぬ御身やてからや 吸ぬ先なかい言や呉な

59

(二) 禁止

板門 軋めかば 誰がて、 思うな 15-1122

こがらしの風や菊の上に吹くな すぎ去りし秋のかたみだいの
全-1578

(ホ) 疑問

おが屋邊より おわよりな ゑけり按司 14-998

IV-3, に

(イ) 願望

早く 御み使い 拝で 輝居らに 8-409

大君に 真南風 乞うて 走りやに 13-750

夏の蘭苧やわか手引しちよて 里か蜻蛉羽御衣よ摺に
368

(ロ) 疑問・反語

伊計の宮童や狂者やあらね 津堅赤ふしやににや打狂て
72

上記「ね」「に」の発音は同じ [ni] である。これら以外にも琉

歌組踊には疑問反語の「め」や「い」も次のようにみられる。

寄る年のもとち若なれよめ 只遊び召れ夢の浮世 13

弥増るおもへ波の夜昼も 乾く間の有い袖の裏や 391

IV-4, ゆ, よう, よ

(イ) 軽い詠嘆, 軽い主張, 間投的

阿嘉の子ゆ 良くむ 又も うち揚がてちよわれ 8-465

てだが穴の御鳥 何 つくせ 有てがよう 13-794

思納やきしまよ 安富相やきしまよ 百度世す ちよわれ

17-1176

あれよ 見れよ 清らやよ 7-379

(ロ) 断定

我身や萍よ風儘と成ゆる 吹合ち給れ思の泊 576

(イ) 呼びかけ

やあ, 父親よ すだし母親や とまいれはもをらぬ銘苧子

(ニ) 念押し

やあ, やかあ, 急ぢ切りすてらすよ 大城崩

IV-5, たいもの (強意)

あらしこゑのあらは無蔵独ひ成め 行逢て事有は一道たいもの
43

勢れかり二才衆二三十といかる 四五十に成は強たいもの
47

本助詞は琉歌組踊に特徴的な助詞である。

注1. 山口栄鉄の訳本書名による

2. 「八重山語彙」宮良当壮。「八重山鳩間方言の助詞」加治工真市(『琉球の方言』8 収載)等参照

3. 『今帰仁方言辞典』仲宗根政善参照

4. 係助詞, 副助詞については「沖縄那覇方言の係助詞・副助詞一琉球方言の鳥職を含む一」(『現代方言学の課題』第2巻収載)も参照していただきたい。

5. 「宮古西原方言の助詞」名嘉真三成(『琉球の方言』8 収載)

6. 「沖縄本部町瀬底方言の助詞」内間直仁(『琉球の方言』8 収載)

7. オモロは「校本おもろさうし」「おもさうし辞典」仲原善忠 外間守善, 岩波の日本思想大系本「おもろさうし」外間守

善 西郷信綱による。琉歌は『琉歌百控』『琉歌全集』島袋盛敏 翁長俊郎を参照した。後者を引用する際は「全」を付した。組踊は『伊波普猷全集』第3巻による。なお、資料の関係で問題の助詞に濁点が付されていない場合があることを断っておく。

8. 岩波本『おもろさうし』P520等参照

9 上書P148の頭注等参照

10. 『日本庶民生活史料集成』第19巻参照

注の文献以外にも次の文献などはよく参考にした

『喜界島方言集』岩倉一郎。『奄美方言分類辞典』長田須磨他。『琉球与那国方言の研究』平山輝男 中本正智。『琉球の方言』1～8
法政大学沖縄文化研究所

古典語の助詞の接続助詞については今回は触れなかった